



2011年 (平成23年)

5月号 (No. 792)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

復興へ、もうひとつの支援の輪を。 東北の山へ行こう

田部井淳子

3月11日の東日本大震災から2カ月以上がたった。しかし、現在も福島原子力発電所による放射能被害は予断を許さない。風評被害も深刻だという。そこで福島県三春町の出身である田部井淳子さんに、福島はじめ東北の山々のよさを綴ってもらった。

福島県の面積は日本で三番目に広く、宮城、山形、新潟、群馬、栃木、茨城県と六県に県境を接している。それゆえ、同じ福島県の中なかを会津地方、中通り、浜通りと三つに区分した天気予報が伝えられる。同じ県でも浜通りと会津地方では気象も食も、芸能も習慣も文化全般が異なっている。方言も違うし、気質も異なる。

私が生まれ育った三春町は中通り地方で、郡山市から約20キロ、阿武隈山地に寄っている。

梅と桃と桜の花が一度に咲くので、三つの春と書いて三春町という。その小さな城下町で私は生まれ、18歳まで過ごした。高校は昔の田村中学、今は田村高校の10期生である。

人口1万弱の小さな町だが、町

目次

復興へ、もうひとつの支援の輪を。東北の山へ行こう・・・	1
新法人定款の主な変更点・・・	3
第19回ピオレドールで海外登山基金の助成を受けたローガン南壁隊が受賞・・・	4
「今西錦司 三角点を巡る——1550山登頂の記録」展・・・	6
外国人による登山150年——オールコックからメスナーまで・・・	7
公益法人認定の申請を急いではならない・・・	8
新法人問題での意見交換にJACホームページを活用しよう・・・	9
大学山岳部の復活奮闘記——①・・・	10
支部だより・・・	11
北九州支部	
活動報告・・・	12
資料映像委員会	
第31回日本登山医学会が開催・・・	12
図書紹介・・・	13
会務報告・・・	14
ルーム日誌・・・	16
会員異動・・・	16
新入会員・・・	16
図書受入報告・・・	17
INFORMATION	18

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木・・・10～20時
水・金・・・13～20時
第2、第4土曜日・・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・・10～18時

内にお寺が11もあり、どのお寺にも垂れ桜がある。4月20日ごろから梅、桃、桜がいつせいに咲き出し、昔ばなしの絵本(といっても知っている人は少ないかもしれない)に出てくるような風景を見ることができる。日本三大桜の一本に入っている「三春の滝桜」はとくに有名で、全国各地からこの桜を見に人々が集まってくる。私が小学2年生の時、遠足場所だった。樹齢1000年以上といわれるこの枝はそれは見事で、太い幹はどっしりと腰を据え、この大地震にもビクともしなかった。

一面に小さなピンクの桜の枝が滝が流れるごとく垂れるので、滝桜とよばれる。エネルギーあふれるこの巨木を、私は毎年、桜の季節に多くの人を案内してきた。

自称「三春さくら案内人」として、三春の町の寺を巡り、山里を歩き、さくら湖を経て滝桜へと歩く。最盛期は滝桜周辺で車が渋滞するが、歩いてみる者に渋滞はない。歩いた後の桜は、また一段と美しい。

しかし、今年はそれができなかった。大地震、その後の津波、東京電力の原発、そして風評と四つの苦を福島県は背負わされたからだ。いつ通れるかわからない道路や新幹線、空港に、桜の企画はすべてキャンセルとなった。1000年に1度あるかないかの災害に出くわしてしまった私たち。あつという間に流されてしまった命の数々。その失われた命の分まで生きていく私たちは、立ち上がらなければならぬ、と思う。この大地震にも耐え抜いた滝桜のつぼみ

は、大きくふくらみ開花する。

2009年春、私はMJリンク（Mはマウンテン、Jは女性）という20歳代から40歳代の自然に親しみたい女性のための山の同好会を立ち上げた。次の世代へ自然の美しさ、よさを伝え、一緒に行動したいと思ったからだ。インターネットでぜひ参加したいと登録してくれた人は800人を越え、自然への憧れ、興味をもつ若い女性が多いことに驚かされた。その第1回目の山歩きを、この三春の町から開始した。三春の町の寺から寺へ歩く道々に咲く垂れ桜に、参加者は歓声をあげ、山歩きのすばらしさを感じてくれた。

ネパール観光年にあたる今年のゴールデンウィークには、この日本の元気な山ガールとネパールの山ガールとの交流も含め、エベレスト街道を歩いてきた。日本からの参加者28人は、カトマンズでネパール観光省が催してくれた歓迎会の席で、ネパールの山ガールと会った。現在、ネパールには、女性のエベレスト登頂者が18人いるという。そのうちの9名が参加してくれ、うち2名（シャイリーさんとマヤさん）は、私たちと一



2010年4月25日、田部井さんが撮影した「三春の滝桜」

緒にシャンボチェまで同行してくれた。2人とも英語もうまいうえ、歌もダンスもうまい。私に、36年前のエベレストについて矢継ぎ早に質問してはメモしていた。シャイリーさんはジャーナリストで、ネパールの雑誌に女性エベレスト登頂の「今と昔」の記事を書くとき張り切っていた。

さて、中通りは三春だけでなく、千本桜、不動桜、地藏桜、紅枝垂桜などなど数多くの桜の名所がある。安達太良、磐梯山、吾妻山などのブランドの山もそろっている。会津地方にはそれこそ国立公園に入った会津駒ヶ岳、田代山、帝釈山、そして尾瀬、飯豊山と、山好

きの人にとっては唾涎の地ともいえる県である。

「うつくしま百名山」という山の選定委員長を任命された時に驚いたのは、各市町村から推薦された「俺たちの山」の多さであった。

それぞれの地域に名山があり、自分たちが自慢できる山があり、生活にも密着した山々があった。

山は圧倒的に中通りと会津地方に多いが、浜通りにも鹿狼山、羽黒山、国見山、野手上山、十萬山、大倉山、五社山、鬼ヶ城山、二ツ箭山など、珍しい地質の山々がある。

今、浜通りの地域は避難を余儀なくされ、いつ帰れるのかわからない状態が続いている。野手上山がある飯館村も計画避難地域にされ、村民は困惑している。カタクリが一面に咲く野手上山に登れる日を、私は1日も早く待ち望んでいる。この広い地域をもつ福島県だが、心ない人々は「ふくしま」と聞いただけで汚染されていると毛嫌い（きらい）のに驚いた。美しい自然にあふれた福島を、私は広め伝えてゆきたい。

今、山好きの私たちにできる支援は、東北の山に行き、泊まり、

食べ、お土産を買ってくるのだと思う。地域の活性化のためには、実際に行って地元の人々と話をすることだと思う。長期的にわたり、東北の山々を歩く計画を私は立てて歩きたい。

会津地方は昔から海に遠いので、生の魚を食べることはむずかしかった。しかし、それゆえに、身欠きにしんを使ったにしん漬や棒だら煮、貝柱をだしにして作ったこずゆ（ザク煮ともいわれる）料理が生まれた。干した魚を上手に使った郷土料理である。猪苗代や喜多方、山都、坂下は、そば処でもある。松枝岐のそばも有名だ。また温泉も多い。

猪苗代の沼尻温泉にある私のロッジも、避難所として県に登録してある。日本山岳会埼玉支部の方たちが、6月には来てくれることになっている。この大地震があったにもかかわらずキャンセルもせず、予定通り行きます、という力強い返事にさすがと思った。

＊

なお、東北を長期にわたって応援していく「東日本応援フォーラム」が開催される。詳細は18ページにあるので、ぜひ参加してほしい。

法人改革

新法人定款の主な変更点

新法人移行PT 吉永英明

新法人に移行するための定款変更案が5月11日の理事会で承認され、来月18日開催の平成23年度第1回総会で審議される運びとなった。

この定款変更案は、法人改革対応検討プロジェクトチーム(PT)が、平成22年2月に答申された定款委員会(内田博委員長)の変更案を参考に、同年6月以降、内閣府のモデル定款に留意しつつ成案をまとめた。今年に入ってからすでに2回にわたって、内閣府公益認定等委員会事務局に相談し、変更内容についておおむね妥当であろうとの返答を得ている。

会報『山』768号(21年5月号)の定款委員会の報告および『山』788号(23年1月号)の当PTの報告に、定款変更の必要性、検討の経緯等が掲載されているので参考にしていただきたい。

以下、総会に提案される定款等変更案の主な改定点について記し、会員各位のご理解を得たい。

1. 定款変更案について

名称 公益社団法人とする。

目的 現行どおり(一部の用語、字句を変更)。

会費 定款では納付義務のみを規定し、金額は定款施行細則に移し変えて規定。総会年1回の開催(予算案は直近の総会で報告)。法律上の社員総会とすること、および議決会員数の確定時期を明記、定足数を現行の3分の1から2分の1に、また定款改定の特別決議を現行の4分の3から3分の2に変更。

役員 理事および監事は総会が選出し、法律上の代表理事としての会長及び業務執行理事としての副会長・常務理事は理事会において選・解任する。任期は従来の2年から法律に基づき2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する通常総会までに変更。監事の理事に対する職務執行監督権限を明記した。

理事会 現行と異なり法律上の機関となる。代表理事等の選・解任権限を明記し、理事会では他理事への委任を不可(Ⅱ欠席)とした。

評議員 会長の諮問に応じて助言する権能のみを付与し、合議体である評議員会は廃止(新法では理事会の権限を強化し、理事会以外の機関が運営に関与できないとされた)。

施行 公益社団法人の設立の登記の日より施行(今般の定款改定は停止条件付き)。

最初の代表理事等 新定款施行の日において法律上の理事会における代表理事等の選任ができないため、附則に氏名を記載する。

2. 定款施行細則変更案

目的 定款で委任された事項のうち、他の規程に規定した事項以外の事項及び運営に必要な事項を規定。

会費 経済状況の変動等に柔軟に対処するため定款から移行した。金額は現行どおり。

名誉会員 現行の推薦内規を細則として規定。

役員定年制 選任時において満70歳を超えないものとする。

以上が今般の定款等変更案の主な改定点である。

なお、これら変更案が総会で決議されたとしても、公益認定の申請に至るまでには事業ごとの区分

経理の構築・習熟、支部の扱い(名称に公益社団を冠することの可否、事業および交付金・補助金の経理処理の一体化等)、定款の委任に基づく各種規程の検討、森づくり会計の扱い等々、多くのハードルを越えなければならない。

さらに、内閣府の了解が得られた後も、支部との協議、各種規程について担当委員会との調整を経たうえで申請ということになる。

最近の情報では、内閣府における審査過程で、ある程度の処分(認可、不認可の見通し)が判明するまで6〜9カ月程度を要するといわれている。ハードルをクリアして申請に至るのは、早くて本年秋ころ、内閣府の処分を見通せるのが来年3月ころと見込んでいるが、もし、公益認定が困難、または不認定の見込みといったことになれば、その理由を精査したうえで、再申請または一般法人への移行を模索する事態になり、定款変更案の決議等、改めて手続が必要となる。

さらに遅れた場合、平成25年まで手続がずれ込むことにもなりかねない。本年の総会での決議をお願いする次第である。

トピックス

第19回ピオレドールで海外登山基金の助成を受けたローガン南壁隊が受賞

萩原浩司

4月13日から18日にかけて、フランスのシャモニとイタリアのクールマイユールにおいて第19回ピオレドールのイベントが開催された。ピオレドールとはフランス語で「黄金のピッケル」の意味。一年間で最も優れたクライミングを表彰する賞のことで、わかりやすく言えば、登山界におけるアカデミー賞のようなものである。

ピオレドールは、世界各国から集められた6名のジュリー(審査委員)によって選考される。今年のジュリーは昨年同様、アルピニスト4名、ジャーナリスト2名による構成であった。オーストラリアのグレッグ・チャイルドを審査委員長に、各国のアルピニストを代表してシモン・アンタマッテン(スイス)、ヤニック・グラディアイニ(フランス)、エンリコ・ロツソ(イタリア)、そしてジャーナリスト枠からはドイツのミハエル・パウゼと私(日本)の計6名。

私は日本で唯一のクライミング専門誌『ROCK&SNOW』の編集長で、過去に3度、韓国で行なわれた「ピオレドール・アジア」の審査委員を務めた実績などから、主催者であるグループ・ド・オートモンターニュ会長のクリスチャン・トゥロムドルフ氏によって招かれた。

審査の経緯を簡単に説明すると、まずは前年度に行なわれた世界各地のクライミングのなかから、事務局が主な記録をリストアップ。それを素材にして、6名のジュリーがメールのやりとりを通してノミネートすべき登攀記録を選考する。ノミネートされた各登山隊は、主催地であるフランス・シャモニに招待され、ジュリーを前にそれぞれのクライミングについてのプレゼンテーションと質疑応答を行なう。それから最終選考会議を経て「ピオレドール」受賞者が決まり、授賞式で発表、という仕組み



「黄金のピッケル」を掲げる横山勝丘(右)と岡田康ペア

となっている。

予備候補としてあげられた53の記録のなかから、われわれが選出したのは、次の6つのクライミングであった。

ノミネートされた6つの記録

1、フォラカー南東壁(5304m、アラスカ)

コリン・ヘイリー(米)とビヨン・エイヴァン・オルトゥン(ノルウェー)による、南東壁の31時間連続行動での初登攀。

2、ローガン南壁(5959m、カナダ)

横山勝丘と岡田康(日本)ペアによる、巨大な南壁全体における

標高差約2500mの初登攀。

3、ヴァスキ・パルバット西壁(6792m、インド)

マルコム・バスとポール・フィッグ(英)による、ガルワールヒマラヤ屈指の未踏の岩壁の初登攀。

4、ルーナク1峰南壁(6895m、ネパール)

マクシム・ベルビユー、他3名のフランスチームによる、1峰南東壁の初登攀。

5、エドガー東壁(6618m、中国四川省)

ブルース・ノーマンド(英)とカイル・デンプスター(米)による、これまで未踏だったエドガー東面の初登攀。

6、グリーンランド西・南海岸のビッグウォール(グリーンランド)ニコラ・ファブレスら3人のベルギー人にベンジャミン・ディッド(米)を加えたチームの、ヨットをアプローチに使った未踏岩壁9本の初登攀。

ピオレドール受賞者決定

ピオレドール週間の4月11日から12日にかけて、各隊のクライマーとジュリーのメンバー全員がシャモニに集結した。12日から14

平成23年度(前期)「海外登山基金助成登山計画」募集

日本山岳会海外登山基金委員会

日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。第25回目となる今回も、困難を求め、挑戦、発想の新しさ、夢多い計画など、ユニークな登山計画を支援したい、と考えています。

会員資格やパーティ編成等の条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

- 対象 平成23年7月～平成23年12月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込方法 所定の様式(事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。
- 申込締切 平成23年6月15日
- 審査と助成期間 平成23年7月中に審査し、理事会で決定、助成。なお、対象となった登山隊は後日、登山報告書の提出を必ずお願いします。JAC会報『山』に掲載します。
- 問合せ・申込先 日本山岳会事務局 電話03-3261-4433

日までの日中は氷河スキーやクライミングを楽しみ、夜は講演会、映画会、そしてディスカッションの場が設けられ、クライマー同士が親睦を深めた。

そして4月15日。最終審査の日。朝の9時からシャモニのマジェスティック・コンベンションホールで各隊がプレゼンテーションをし、昼食後、6人のジュリーだけが

会議室にこもって審査を行なった。

ピオレドールの評価のベースとしてあげられているテーマは、登山のスタイル(酸素やフィックスロープ、高所ポーターなどの補助手段を使用しないなど)、探求的精神、技術的困難度、傾倒の度合い、危険を回避するための最小限の装備の使用、パートナーや現地住民の尊重、環境へのローインパクト、そして次世代のクライマーへの配慮(支点やロープ等を残さず山を元の姿のままに保ち、探求と冒険の可能性を残す)など。ジュリー一同、これらを再確認したのちに、各々が「黄金のピッケル」にふさわしい登山隊とその理由を述べていった。そしてその結果、ジュリー全員が最初に推薦したのが日本のローガン南壁隊であった。その理由は、標高差2500m(取付からのトータルでは3300m)の、アイガー北壁をふたつつなげた巨大なスケールの岩壁を、初見で、危険を排除した論理的なルートを選んで初登攀に成功したこと。そして頂上稜線に抜けてからも、悪天につかまる危険を押して頂上を往復した情熱。小人数、低予算で、次世代につながるクリ

ーンなクライミングを行なったこと、などが高く評価され、これこそが「リアルなアルパインスタイル」として授賞することになった。そしてもう1隊。ヨットというユニークなアプローチで未踏の壁を探し出し、ピトンやボルトなどの残置支点を岩場に残すことなくクリーンに9本の初登攀を登ったという理由から、グリーンランドのベルギーチーム隊にも金のピッケルが贈られることになった。

審査当日の夜、マジェスティック・ホールの授賞式会場では、会場を埋め尽くした観客の前で登山隊メンバーとジュリーが紹介され、各隊のクライミングについて映像をもとに解説されたのち、受賞した2隊のチーム名が読み上げられた。そして、万雷の拍手に後押しされて壇上に上がった日本人ペアとベルギーチームは、シャモニ市長から金色に輝くピッケルを受け取ると頭上に高く掲げ、各国ジャーナリストのカメラに収まった。

理想のクライミングとは

ピオレドールは、クライミングの優劣を競うコンペティションではない。むしろ、世界中から集ま

ったクライマーと審査委員がともに登り、ともに語り合うなかで次世代の理想のクライミングを考え、「クライマーズ・サミット」の側面が強かったように思う。各地の山の情報を交換し、次の目標を話し合い、その勢いで来年のクライミングの計画が決まるなど、クライマー同士の密度の高い交流の場として機能していた。

今回、最終的には次世代へのメッセージ性の高さから2つの登山隊に「黄金のピッケル」が渡されたが、互いのクライミングに対するリスクと、クライミングの理想について真剣に語り合ったその姿に、このイベントの本当の価値があると思われた。今回、世界のトップクライマーやジャーナリストたちとともに登り、語り合った経験を、今後の日本のクライミング界を担うクライマーたちに向けて、なんらかの形で伝えていければと願っている。

なお、第19回ピオレドール受賞のローガン南壁隊は、JACの海外登山基金の助成を受けて実施された。記録の詳細については6月刊行予定の『山岳』を参照してほしい。

イベント 「今西錦司 三角点を巡る——1550山登頂の記録」展

三好まき子

故今西錦司元会長の地図が国土地理院に寄贈されたのは2年前のこと。赤線がなぞられた1281枚の地図が愛用のマップケースごと、つくば市の国土地理院に収められた。そしてこの春、併設する「地図と測量の科学館」の企画展で、その実物が公開された。

登山ルートが赤線でなぞられ、同行者やコースの書き込みがある氏の地図は、古いものは参謀本部陸地測量部時代にまでさかのぼる。その「地図の整理法」を、氏は古い会報『山』にこう書いている。「私も地図をもちだすときにはハツ折りにして、私の図のうの中へ入れて歩くが、かえるや否や、このたたんだ地図を開いて、まず歩いてきた道に赤鉛筆で太く赤線を入れる。(略)私の場合にはひろげた地図をふたたび畳まないで、念入りにしわをのばしたうえで、これを筆筒式になった引きだしにしまいこむのである。(略)なにしろ、右書き時代の地図を、おおかた揃

えていたところへ、あらたに左書き時代の地図が発行されたのだから、地図が多すぎるのである。(略)その他に台帳というか台地図というか、山へは絶対にもってゆかない、そのうえに各山行の赤線を集積した地図がある。これほど紛失のおそれのない地図はないであろう『山』1977年6月(384)号

なんと、山へもって行く地図ともつていかなない地図があったのだ。そしてこの膨大な地図が、文中に登場する「筆筒式になった引きだし」のマップケースにしまわれていたわけである。

また『山』には三角点への思いも寄せられている。

「山頂に埋められた三角点の標石は、われわれにとって、ここが山頂だということをあらわした、一つのシンボルである。(略)」

山頂の三角点標石は、また、ゴールにはられたテープのようなものである。(略)ゴールのテ

プは第一着の走者だけしか味わうことができないが、これはテープをはりかえている時間がないからであって、ほんとうなら一人一人の走者にテープが与えられてもよいものと思うが、この点で登山は先頭をあらそう競技でないから、さきに登ったものもおくれてきたものも、みな同じように三角点にふれることができて、しあわせである『山』1975年5月(359)号

この三角点に寄せる思いが、晩年まで氏をつき動かして「1000の山へ、1500の山へ」と向かわせていたのだ。

さて、企画展の会場の入口で、前述のマップケースが出迎えてくれる。フロアーの真ん中に三角点の実物が立っていると、これは国土地理院ならではの陳列ケースには、今西家や京都大学総合博物館から借り受けた愛用品が並ぶ。登山用具やカメラは登山家の氏ならではの、使い古された標本ケースやルーペ、釣竿、フィールドノートは氏が生態学者であることを強く物語る。そういえば沢ごとにイワナの数を書き込まれた地図もある。

壁面に展示された氏の古い地図の隣に、その山域の現在の地理的データや写真を対応させているのも、国土地理院らしい企画だ。登山行為の対象としてだけではなく、地図や三角点などの地理的な側面から山を捉えることができるのは新鮮だ。そしてあらためて気づくのは、この多面的な視点こそ今西錦司の世界なのだということだ。

この企画展は、本会も協力団体として準備の段階から、資料の提供や蔵書の貸出しで協力し、本年3月8日の開催にこぎつけた。関係する茨城支部をはじめとして図書委員会、山岳地理クラブが、支部・委員会・同好会の垣根を越えての応援となった。ところが開催4日目の東日本大震災で科学館も被害を受けて閉館を余儀なくされ、再開後もわずかに2週間の短い開催で5月8日に会期を終えざるを得なかった。予定されていた長男の今西武奈太郎氏をはじめとする、関係者の講演も中止になってしまったことも残念である。

国土地理院には、ぜひ再度の開催をお願いしたい。

ヒストリー

外国人による登山150年——オールコックからメスナーまで

上村信太郎

逆転の発想で調査スタート

我が国最初の外国人登山は、ペリー艦隊二度目の来航から6年後の万延元(1860)年に、初代駐日イギリス公使オールコック一行が行なった富士登山とされる。その登山から150年が経過した。

これまで外国人の登山については、『日本山岳会百年史』のなかの「明治の外国人の登山」にみられるように、ウェストンの山行や明治期における外国人登山が重点的に研究されてきた。理由は外国人初登頂が明治期に集中していることと、登山記録や関連資料が豊富だからである。しかし、明治以降今日までの、外国人登山をトータルに概観しようとした場合、データベースとなる文献や書籍は残念ながら見当たらない。

そこで、よく目にする「日本人による海外登山年表」からヒントを得、逆転の発想で、「外国人による日本登山年表」の作成を目指し、山岳雑誌、年鑑、会報などの

資料を調べてまとめてみたのが本文である。

大名行列的な富士登山

外国人最初の登山となったラザフォード・オールコック一行による登山目的は、安政5(1858)年に結んだ日英修好通商条約にもとづき日本国内を自由に旅行できる権利を行使するためであった。

では一行の山行がどのような実施されたのかみてみよう。メンバーは公使のほかインンド海軍の大尉、植物学者、銃剣で武装した7人の公使館員、トビーという名の犬一匹。日本側からは幕府の副奉行ら数人、荷役を含めおよそ100人。さらに馬30頭。まるで大名行列のような登山隊であった。コースは、神奈川のイギリス総領事館から箱根、三島を通り村山口から全員登頂。日本側は頂上へ登らなかった。

それからおよそ一世紀を経た昭和36(1961)年、ふたたび大名行列的な富士登山が行なわれ

た。登山の主は、ジョン・F・ケネディ政権閣僚のスチュワード・L・ユードル内務長官。一行は警護や報道陣を含めて総勢60人以上。当会会員も案内役に加わった。外国の現役閣僚による富士登山はこれが初めてであった。

さらにユードル長官から33年後、三たび大名行列的な登山が繰り返された。第39代アメリカ合衆国大統領ジェームズ・R・カーターが夫妻で富士山登頂を目指した。特使として北朝鮮、韓国を訪問後に訪日したもので、大勢のSPや報道、山岳関係者らが随行した。あまりのもののしさを気にした元大統領の求めで、六合目から上部は元大統領、ロザリン夫人、山岳ガイド、通訳の4人だけのパーティで行動し、取り巻きは離れて見守ることになったという。

維新前後の外交官による富士登山 イギリス公使による最初の外国人登山に刺激されて、その後各国の駐日公使をはじめとする外交官の富士登山がブームを呈した。

慶応2(1866)年夏、スイス駐日総領事カルパール・ブレンワルト一行は、副領事のヘルマン・シーベルほか2人のスイス人と日

本側役人5人のパーティ。小田原、箱根を経由、村山口から登り、須走り口へ下山した。

この翌年、駐日オランダ公使フォン・ポルスブルック一行が外国人による富士山第3登を達成。

同年、駐日イギリス公使ハリー・スミス・パークスが友人、夫人を伴って村山口から登り、お鉢めぐりをして須走り口へ下山。公使夫人ファニー・パークスは外国人女性最初の富士山登頂者となった。

ドイツ駐日公使マックス・フォン・ブラントは、来日当時はロシアのオイレンブルク伯爵の使節随員だった。明治2(1869)年に、モンテベルロ伯爵、オーガステイン・ハード、通訳のケンパーマンと富士山に登った。コースは箱根、三島を経由し、須走り口から登り、北口へ下山。

日本山岳会創立メンバーの一人、武田久吉の父であるアーネスト・メイソン・サトウは、来日時はイギリス公使館の通訳生だった。その後外交官として活躍。明治10(1877)年に元同僚のフレデリック・ディキンスと、さらに5年後にはパークスとその娘らと一緒に富士山に登った。(続く)

オピニオン

公益法人認定の申請を急いでではない

内田 博

映画にもなったアイガー北壁

の悲劇は、往きにトラバースした岩壁を帰りに渡り返すことができなかったことだった。本会がその轍を踏む恐れなしとはいえないので、公益法人認定の申請を急いではならない理由を再度述べよう。

一般法人はいつでも公益法人になれる。しかし、その逆はできない。ひとたび公益法人になったら一般法人には戻れないから、なんらかの事情で公益法人資格を失えば、本会は解散するしかない。

数値基準

公益法人新法の特徴は、数値基準を導入したことである。「公益法人は総事業費の50%以上を公益目的事業に費やさなければならぬ」という規定がそれである。それぞれの数値は、会計帳簿から算出される。正しい会計帳簿が前提になるが、本会の会計帳簿は果たしてどうなっているのだろうか。

会計帳簿が正しく作成されるには、①会計基準が明瞭であること。②会計担当者が会計基準に通

曉していることが必要である。

経理規定

本会の場合、会計基準に相当するものは、経理規定であるが、現在の経理規定は明瞭とはいえない。たとえば、本会の年会費1万2000円のうち2500円ほどは、その会員の所属する支部に助成金として本部から支給される。支給したお金がどう使われたかは、当然、本部に報告がなければならぬ。その意味で、本部と支部との会計帳簿を合算して、本会の会計帳簿ができるのだが、この手順が経理規定には示されていない。

個々の公益目的事業(会報『山』791号4ページに列挙)の支出金額も、会計帳簿をもとに算出するのだが、その算出手順はどうなのか。たとえば「高尾の森」の会計はどう本会の会計帳簿に反映すべきなのか。数値基準の計算根拠、すなわち「総事業費」及び「公益目的事業費」を会計帳簿から算出する手順は、明瞭でなければならぬが、筆者はその点に不安を感じる。

会計担当者

日々の会計取引を記帳するのは本部及び支部の会計担当者である。不明瞭な経理規定を補いながら適切な会計仕訳をし、正しい会計帳簿を作成するのは容易ではない。そのうえ、本会の「総事業費」及び「公益目的事業費」を算出しなければならぬ。気がついたら数値基準を満たしていなかった、というようなことは、万が一にも起こってはならない。支部の会計組織強化もさることながら、本部事務局体制の整備及び事務局を管理監督する総務担当理事の職務権限の明確化が急務である。

経理規定の改定案

平成23年6月の総会で、定款改定案、細則改定案及び支部規定案を審議するという(会報『山』790号5ページ)。その時、経理規定改定案も当然に審議対象にすべきであろう。その改定案が右に述べた筆者の危惧を払拭するものになっていることを期待したい。

正しい会計帳簿が作成されているということは、組織の足腰がしっかりしていることに通じる。本会は足腰を鍛えることに、いまずぐ大車輪で取り組まねばなら

ない。足腰に自信がもてるようになった時、初めて公益法人認定の申請を検討するがよい。平成25年11月が期限なのだから時間はあまる。それとも、なにか急がなければならない特別な理由があるのだろうか。

ところで、定款等の改定案がいまだ開示されていないのはなぜだろうか。膨大な語数になるであろう定款、細則、諸規定の改定案を総会直前に渡されて、それを総会で審議しろといわれても、会員は困惑するばかりだ。その議決を求めることなど論外である。

オピニオン

新法人問題での意見交換に JACホームページを活用しよう

織方郁映

3月12日の第2回通常総会では圧倒的多数で公益法人化案が承認されたと聞く。

会員から聞こえる声のほとんどが、公益化反対だと感じていた筆者にとつては意外であった。また、「JAC100年の歴史がな

ぜ無縁の法改正で翻弄されるのか。憤りさえ感じる」と会報に書いておられた会長が、「創立以来100年間、ずっと公益法人としての活動をしてきたから」との理由で公益化に積極的になられたことも意外であった。

小島鳥水氏らがJACの設立時に言ったという「蓋し是は国民的事業にして、決して少数人士の能く為し得るところでない」の真意は、「日本での登山活動を活発にするには、大勢で力を合わせねばならない」であって、公益活動を奨めたのではないはずだ。

JACが社団法人になった昭和16年は、戦局の苛烈化に伴って

あらゆる活動が「お国のため」となり、登山界もそれに同調させられたところだった。また、戦後の海外遠征では「学術調査」という公益目標を掲げたが、登山活動で^{かつ}赫々たる成果をねらって出国するための方便だった。

このようにJAC100年の活力の源泉はすべて「好きな山に没頭すること」であって、その結果として公益に資したことはあっても、およそ公益を第一目標に掲げて行動したことはなかったはずである。

にもかかわらずなぜ、これまでのJACに強く愛着を感じている古参の会員が大部分のはずの総会で、公益化承認の意見が大勢を占めたのか。従来の路線を行く一般法人でいこうとどんなに頑張っても、アルピニズムとともにJACも自然消滅する運命にあると観念したのだろうか。

総会に欠席した大部分の会員

は「JACの体をなさなくなったから退会すればよいのだ」と構えて無関心なのだろうか。公益法人でも一般法人でも運営が煩雑で面倒なのは同じなら、お役人が勧める公益法人になって、面倒なことは天下り役人に頼んだほうが楽ではないか、との判断があったのだろうか。

一般法人化受け入れを躊躇させる最大の理由は、「一般社団法人の場合、その認可申請時の公益目的財産額に相当する金額の残額が零になるまで、公益目的事業に支出せねばならない」の項目らしいが、そもそも昭和16年当時の「公益目的財産額」とは何だったのだろうか、など疑問は多い。

最近では公益化のハードルはどんどん低くなって、「JACの活動は従来通りでよい」と言われているらしいが、補助金や寄付での恩恵の代わりに、山を知らない役人から山岳会の行事を監督されるという迷惑な仕事だけは確実に増えるのだ。

会員数7万余の日本アマチュア無線連盟は、天下りの多い組織との関係が煩わしく、これ以上干渉されたくない、との理由で一般

法人を選んだと聞く。また、役所の方針に合わない本当の自然保護活動が難しくなるという環境問題従事者もいる。

当会は拙速を避けて、新法人への移行期限の平成25年11月末まで時間をかけて会員の意見を十分に聴き取ってほしいと思う。そのためには、会員が積極的意見を開陳する場が必要であり、それにはJACのホームページの掲示板の活用が最適だと思うが、いかがだろうか。

大学山岳部の復活奮闘記

①発端

落合正治(神奈川大学山岳部 監督)

大学山岳部の凋落は今や周知の事実で歯止めがかけられない。神奈川大学も例外ではなく2000年、流れに飲みこまれるように休廃部危機に陥った。

*

年の瀬を迎えた98年、現役3年生から「今度新人が入らないと再来年4月から山岳部が休部か廃部です」という知らせが歴代チーフにもたらされた。とはいえ、暫し山とは縁の薄かったOBには成すすべもなく春を迎え、それが現実となった。5月連休に、後輩の樋詰順郎からその顛末一部始終を聞き、「何とかして」と悲痛な声で救済を迫られた。

「いまさら山岳部なんて」と思いつつも、脳裏に浮かんだのは若き日々苦楽を共にした懐かしい顔だった。まずは事の経緯を一文にまとめOB全員に発送するかたわら、部室の引っ越しや先輩、後輩、同期の主だったメンバーと準備委員会を立ち上げた。

OBたちの返事は130余名中30数人が再編成に賛成、残りは

委任、早速設立発起総会を招集すると、終戦直後卒から最近までのOBが駆けつける。この席上で今後の戦略と展望を述べ「セブンサミッツ計画」を披露するが、部員なしでは夢物語とあえなく否決されてしまった。復活支援には活動資金も必要と寄付を募り、同時に大学校友会支部に加わり、会報『杣人』を復刊して活動状況と窮状を会員に投げかけた。

翌春4月、入学式前後にポスターとチラシ片手に、白髪交じりのOBとその娘や友人たちが大学キャンパスに乗り込んで、テントを張って大々的に部員獲得作戦を展開したが、健闘空しく初年度は無残な空振りに終わり一同挫折感で萎えてしまった。そして運命のミレニアム、最後の現役2人は卒業し、入部者もなく部員ゼロの山岳部は「休部」となった。

翌年4月、前年の轍を踏むまいとキャンパスに乗り込むが、今ひとつ反応が薄い。もうダメかと観念したところに、地元の高校WV出身の宮守健太が平塚キャンパス

からやってきた。今どきの青年にしては珍しく、目が輝いていたのが印象的だ。とりあえず首の皮1枚で繋がり、廃部は免れる。

夏山合宿は県下3大学で協議し、各大学1名の合計3名が徳本峠から蝶ヶ岳、常念岳縦走で横尾に入り涸沢定着と、北ア全山縦走計画案がまとまった。

夏休み早々上高地から入山したが、ハードな行程にA学院大学の部員が涸沢への荷上げ途中に脱走。残った2人と監督2人で前穂高北尾根からと北穂高南稜からザイテングラートへの縦走を消化し、大キレットの難所から槍ヶ岳へとエスコート。ところが今度はB学院大学の部員が薬師岳手前の太郎平で体調不良を理由に脱落。宮守健太は渾身の力を振り絞って三田平にたどり着き、劔岳を往復して一ノ越から黒部湖経由で扇沢へと単独縦走をして無事下山した。

この冬は遠見尾根から五竜岳へと挑戦するが、胸までのラッセルに阻まれて西遠見で撤退。明けて新人募集の時機到来、2人入部するがすぐやめてしまう。そんなところに山ガールが入部してきたのである。

(続く)

東日本大震災の義援金続々、6月10日が締め切りです

東日本大震災の発生から2カ月余りが経った。死者・行方不明者は2万4800人。地震、津波、それに福島原発事故による放射能汚染を合わせた避難者は、11万5000人と伝えられる。

日本山岳会は大震災直後の3月11日に募金委員会を立ち上げ、尾上会長が救援を呼びかけた。5月13日までに、全国各地の会員265人と、5支部、4グループから合わせて435万円の義援金が集まった。台湾からも大口の寄金が寄せられた。離れていても何か役に立ちたいとの熱い思いが積み重なった。来月10日には締め切り

支援、激励企画を募ります

さて、このお金を何に使うか。そのまま日本赤十字社に寄託して、広く被災地域の復旧と復興支援に役立ててもらおうという選択がある。一方でJACらしい何かができるはず。特に被災地の子どもたちに向けて、という動きもある。理事会でも検討するが、会員から、実現可能な提案をぜひ寄せてほしい。

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

北九州支部

大量のゴミに驚嘆！

英彦山清掃登山

「日本二百名山」の英彦山（1200m）は、古くから日本三大修験道の山のひとつとして知られてきた。

北九州支部では、この英彦山の清掃登山を数年前から実施してきたが、本年も3月27日に実施した。参加者25名は、地元の添田町指定のボランティア用ゴミ袋を片手に、3コースから清掃登山に向かった。

それぞれ一般登山道では、ほとんどゴミは見当たらないが、一歩横道にそれるとゴミがいっぱい。古い空き缶やビンが目立つ。そして、圧巻は山頂の展望台からの眺めならぬ、展望台真下の崖下であつた。ザイルを木に掛けて下ると、なんとあるわ、あるわ！一

升瓶やビール瓶、ウイスキー瓶、酒トックリ、空き缶類等々……、ゴミの山だ。崖下のため、何十年も、いや数百年も前からまったく清掃をしたことがない場所、貝塚ならぬゴミ塚であつた。

回収したゴミは、燃えないゴミ、ビニール袋35袋、燃えるゴミ10袋で、ガラス瓶が50本、そのなかには一升瓶が数本あつた。今どき一升瓶を持って山に登るなんて考えられないことで、おそらく昔の観光客か登山者の捨てたものと思われる。英彦山に限らずほかの山でも、休憩所周辺の人の目が届かない場所を探せば、多くの古いゴミが出てくると思われる。

登る途中、燃えないゴミのあまりの多さに、八合目付近に5袋のゴミ袋を下山時に回収するため一時デポした。そして、山頂に着いて、今から下山しようとする若者グループに、「下山するなら、途



大量のゴミを回収しながら、英彦山の頂上へ

中のゴミを持って下りてくれね」と、できるか半信半疑のまま頼んでみた。そして、われわれが下山途中、ゴミ袋のデポ地点を見ると、ゴミ袋はすべてなくなっていた。若者達がすべて持って下りてくれたのである。ゴミは登山口の指定の場所にちゃんと置いてあつた。今の若者もなかなか捨てたもんじゃないと思った。

今回のような清掃登山は、JACがかかえる公益法人化に向けての一つの事業として、地元や一般登山者も参加できるように行事にしていきたいと思う。

（伊藤久次郎）

映画『氷壁』を上映

2月11日、小倉北区の北九州商工会議所ホールで、映画『氷壁』を上映した。

昨年10月、北九州支部創立10周年記念式典に日本山岳会の尾上会長を講師に招いて、映画『氷壁』のモデルとなった「ナイロンザイル事件」の話をしていただいた。その際に、会長からいただいたDVDを上映したのである。人数限定で一般の人にも新聞で呼びかけ、約150人が観賞した。

（伊藤久次郎）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

資料映像委員会

堀田弥一氏の遺品が寄贈

2月23日、102歳で逝去された名誉会員・堀田弥一氏（会員番号1231）の遺品をご寄贈いただきました。

堀田氏は、1927年、立教大学山岳部に入部。主に立山から剣鹿島槍を中心に多くの足跡を残されました。そして、この日本の冬の経験から、1936年秋、日本人初のヒマラヤ遠征「立教大学ヒマラヤ踏査隊」の隊長としてナンド・コートに挑み、みごと初登頂に成功しました。

遺品は、初のヒマラヤ遠征を綴った日記帳、現地と交わした書簡、写真など、貴重なものばかりです。大切に保管し、有効に活用させていただきます。折をみて皆さんに公開したいと考えております。

（奈良千佐子）

第31回日本登山医学会が開催

6月11日（土）、12日（日）に国立オリンピック記念青少年総合センターにて、第31回日本登山医学会が開催されます。メインテーマが「実践的な登山医学をめざして」とし、わかりやすく、実際に役立つ内容であることを意図しました。

1日目には緊急ワークショップ「大震災でみたこと・できること」を急遽企画しました。実際に体験したこと、どのようなことができるかなどについて、石井正氏（石巻赤十字病院）、西澤匡久氏（志津川病院）からの現地の声に耳を傾けたいと思います。

特別講演ではセロトニンの研究で高名な有田秀穂氏（東邦大）に、登山は脳を活性化する、つまり登山で精神的にも元気になるという話をさせていただきます。

シンポジウム1は、「登山のた

めのトレーニング——基礎体力をどのように作るか」というテーマで、石井直方氏（東京大）、山地啓司氏（立正大）、山本正嘉氏（鹿屋体育大）に集まっていたいただきます。石井氏は研究者ながらボディビルダーで、『瘦筋力——確実にやせる筋トレ術』（学研新書）の著書があり、筋トレの専門家です。山地氏には持久力の付け方について、山本氏には中高年登山者の体力不足と今後の課題について講演していただきます。

ランチオンセミナーでは、飯野靖彦氏（日本医大）に登山と水分・塩分摂取について最近の話題を提供していただきます。

さらに、日本でも昨年、認定山岳医制度が発足し、今度の学会で初めてのライセンス授与が行なわれますが、1年半前に英国で認定山岳医ライセンスを取得された大城和恵氏（心臓血管センター北海道大野病院）に、英国でのご経験を報告していただきます。

睡眠時無呼吸症候群について子島潤氏（鶴見大内科）に教育講演をしていただきます。睡眠時無呼吸症候群の方は低地でも睡眠時に低酸素症になりますが、酸素の薄

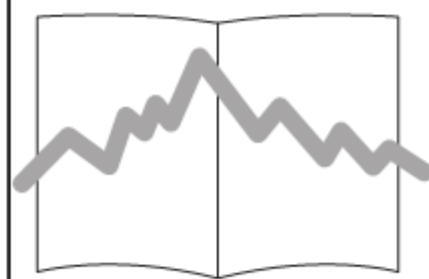
い高所では一層、低酸素症が顕著になりますので、注意が必要です。会長講演として、私が行なってきた富士山山頂での、睡眠時無呼吸症候群の治療に使われる口腔内装置の効果などを含めてお話しします。その他に、一般演題34題がポスターで発表されます。

2日目には、シンポジウムとして、セブンスミッター医療関係者の篠崎純一医師、河野千鶴子看護師にお話をさせていただきます。篠崎氏は酸素を使われた経験に基づいて興味深いエピソードを中心にお話を、河野氏は56歳からの8年間で4つの8000m峰を登頂した経験に基づいたお話を、それぞれしてくださる予定です。

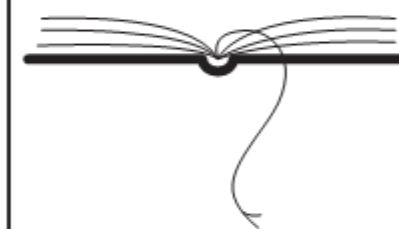
教育講演として船木上総氏（苫小牧東病院）に、トムラウシ山遭難現場を検証された目で、低体温症についてあらためて問題提起と整理をしていただきます。

最後に、ランチオンセミナーで救急蘇生法について、小菅宇之氏（横浜市大救命救急センター）に講演していただきます。救急蘇生法は最近ガイドラインが激変し、タイムリーな企画と言われております。

（会長 野口いづみ）



図書紹介



アンドレ・エラール・著
秋山康男・大社貞子・訳

『ジョン・ラスキンと地の大聖堂』



2010年7月
慶應義塾大学出版会刊
A5判 364頁
定価 6090円

シャモニの街中からブレヴァンに行くロープウェイの駅まではきつい坂道だが、その駅を過ぎたお少し登ると、左手の森に入道がある。道標に従ってそこを進むとすぐに、大きな岩とベンチがあつて、その岩にひげをたくわえた人のレリーフが刻まれている。ジョン・ラスキン(1819～1900)である。

いまでは名のみ有名で実体が知られていない人の代表みたいになつてはいるが、登山史のなかでの重要人物だ。美術・文学事典を開けばその面から詳しく説明されて

いるが、山の人としての扱いはない。本書は、そのラスキンをフランス人の著者が山(と言ってもラスキンの場合、山＝アルプスなのだ)に焦点をあててまとめた評伝である。

志賀重昂『日本風景論』からウエストン、小島鳥水、横有恒、さらには大島亮吉など、ラスキンの影響を受けた登山思潮の流れがあり、日本山岳会の誕生にはラスキンが無縁ではないと鳥水自身が語っているほどだ。文芸の分野でも、芥川龍之介はその「槍ヶ岳紀行」で、ラスキンの「山は自然の(風景の)始にしてまた終なり」を引用している。それはラスキンの『近代画家論』(全5巻)の第4巻・山の美についての論考にある。

ラスキンは風景画家ターナーの評価が低いのに異議を持つて美術論を始めた。ターナーといえば、漱石の『坊っちゃん』で赤シャツ

と野だいこが話題にして、坊っちゃん、だれだか知らないが、と語る画家、という大変な紹介だが、その美術論では山が美の世界として重要な位置を占めている。

ラスキンは14歳のときシャモニを訪れてアルプスの魅力にとりつかれ、その後何回も通うことになり、土地まで購入するほどの惚れ方だった。

アルプスに登らずにアルプスを論じる人と揶揄されたが、本書を読めば、ビュエには登っているし、ランドネは頻繁に行っている、アルプスをよく見ていることがわかる。自身画家でもあったからそのスケッチが収録されているが、なかなか雰囲気がある。ラスキンの文章もまた、山の持つ光と色彩とを瑞々しい感覚で描く。

小島鳥水が使う「アルペン(アルパイン)・グロー」(山の栄光)という言葉もラスキンの借用だが、山と雲とは友達という表現ほか、ラスキンの山を見るこまやかな目をエラールは的確に解説する。書名は「山は人間にとって学校であり大聖堂」というラスキンの言葉からきている。

山の美を理解しないアルピニ

ズムへの否定的態度や自然破壊を伴う近代文明への物言いにも触れているが、著者の説明は好意的。

両親の偏愛から結婚に失敗する話や、晩年の少女愛好とピーター・パン症候群など意外な面を知ることにもなるが、それはラスキンの山岳美論を理解するのには目をつぶっていい。

いまラスキンのその著作は、京都の出版社・法蔵館から第3巻(風景編)まで新・部分訳が出ているが、第4巻・山岳美論編はない。そういう時代に、ラスキンの自伝や日記を縦横に使って、その生涯と山の思想を明快に解説してくれる本書の刊行は喜ばしい。

最後に、この訳書に十二分の敬意を表したうえでいささかの疑問を。数字は該当ページ。

10 注記。ヘルマン・ブルがナング・パルバットで遭難は誤り。
128 注記。ルイ・ラシユナル『眩暈のノート』Carnets du Vertigeは邦訳『若き日の山行』がある。

308 本文。「アールベルクーカンダハルの有名なコースの発見者、アーノルド・ラン」は原文がそうならば適切ではないから補充説明が必要である。(大森久雄)

会務報告

平成23年度第1回(4月度)理事会

日時 平成23年4月13日 18時30分～21時30分

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・永田各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

【委任】 谷川・萩原各理事

開会にあたり尾上会長から、東日本大地震については罹災地における各支部からの報告では人的被害はなかったとのことであるが、罹災された会員の方々に対して衷心からお見舞いのことばがあった。義援金募金については会員の皆様から多くのご厚志が寄せられていることに謝意が述べられた。

また、来たる6月の総会では

「公益法人」へ向けて定款改定(案)を諮り、ご承認いただく極めて大切な総会であり、本日もそれに向けての議題もあり慎重なご審議をいただきたいとの挨拶があった。

【審議事項】

1. 新法人への定款改正(案)(藤本)

新法人移行検討プロジェクトチームの吉永英明リーダーから定款改定(案)の包括的な説明があり、定款ならびに定款施行細則について改定案、現行規定の改定・変更箇所に関して逐条説明とそれに対する質疑、検討が行なわれた。改定案について若干の意見等があり、5月度理事会で成案を得ていくことが確認された。(継続審議)

2. 特定資産である基金・積立金の整理等(岡部)

Ⅰ「基金および積立金等に関する細則」の設定と適用

当会の特定資産である預金に

関する「基金および積立金等に関する規程」は昨年5月に制定したが、基金・積立金等の積み立ておよび取り崩し等の運用細則としてあらためて「基金および積立金等に関する細則」を制定するもの。

細則の制定について、一部文言の追加を条件に承認されたが、各基金の積み立てと取り崩しを、細則どおり平成22年度決算に適用するか等も含めて、5月理事会で再審議することとなった。(継続審議)

(2) 「特定資産(各種基金、準備金等)の預金の振替」について

「基金および積立金等に関する細則」を定めることに伴い、各基金の整理を行なうこととし、秩父宮記念基金のうち、平成18年以降に一般預金から振り替えられた金額を、長期計画準備金と一般預金への振替を行なうことにした。金額については精査の上、5月理事会で再審議することとなった。

(継続審議)

(3) 「終身会費積立金」の整理について

平成22年度決算において、公益法人会計基準(平成16年度)に従った処理に正すため同積立金預金は、取り崩し一般会計に繰り入

れることとする。また、当年度以降においては、収受した終身会費の金額は、負債(預かり金)として計上して、その後10年間に取り崩し、その金額を終身会費収入に計上する、本来の会計処理を行なうことにした。(承認)

(4) 「永年会員への寄付依頼」について

永年会員の増加しつつある現状に鑑み、今年度より、永年会員に会費助成のための任意の寄付をお願いする。(承認)

3. 「ふるさとやまの人物ものがたり」への写真掲載許可願い(宮崎)

富山県教育委員会からの委託により(有)楓工房から宇治長次郎の写真掲載願いがあり昨年11年度の理事会にて承認済みであるが、今回富山県教育委員会から前述刊行物が有償販売(実費相当額)するに当たり、改めて許可願いが3月24日付であったもの。(承認)

4. 新法人移行プロジェクトチームの設置(宮崎)

先の総会において公益法人へ移行が決まったことにより従来の「新法人移行検討PT」を解散して、新たに「新法人移行PT」を

設置する。

メンバーはチームリーダー

吉永英明(7045)、メンバー

高原三平(7949)、佐野忠則

(12887)、吉川正幸(734

5)、直江俊式(14775)(承認)

5. 『山岳』の記事転載願ひ(成川)

高澤光雄会員(5308 北海

道支部)から本人執筆の『山岳』

第97号収載の「北海道から最初に

入会した河合篤叙と蝦夷富士登山

会」を本人準備中の自著『北海道

の登山史探究』(仮題)に転載し

たいとの願ひがあった。(承認)

6. 写真・図表の転載許可願ひ(宮

崎)

大町市教育委員会から平成23

年度企画展(信州大学山岳科学

総合研究所と大町山岳博物館の

連携企画)の解説書(有償分譲

@300円)に『山岳』第4年第

2号(1909年)213ページ掲載

の「上條嘉門次と狛小屋」写真に

ついて転載したいとの願ひがあっ

た。(承認)

7. 山梨支部「総会報告」(宮崎)

4月9日開催の総会報告があ

り、支部長の交代が承認された。

新支部長 遠藤靖彦(6653)

退任 古屋学而(5499)

(承認)

【報告事項】

1. 平成22年度第2回通常総会の

委任状(宮崎)

前回の総会案内発信総数への

回答状況は「委任」41割、出席3

割、無回答56割であった。無回答

の傾向は概ね全国共通のような状

況にある。6月総会に必要な4分

の3以上の回答(委任状)を集め

るには、無回答者を圧縮していく

ことが必須である。総務委員会

種々検討しているが、協力をお願

いしたい。また、各委員会、同好

会、支部などを通じて回答を寄せ

るよう働きかけをお願いしたい。

2. 秋田支部「総会報告」(宮崎)

4月2日開催したとの報告が

あった。

3. 富山支部「総会報告」(宮崎)

4月8日開催したとの報告が

あった。

4. 九州5支部集会の講師派遣依

頼(宮崎)

熊本支部から九州5支部集会

が6月4日～5日阿蘇市で開催す

るが、本部役員挨拶と講演講師派

遣依頼が4月8日付けであった。

5. 役員名簿、連絡担当者、移行

調査に関する調査(宮崎)

文部科学省競技スポーツ課か

ら例年通り報告・連絡依頼があっ

た。

6. 法人実地検査の実施(宮崎)

文部科学省競技スポーツ課か

ら平成22年度実施予定の法人実地

検査を近々実施する旨の連絡とア

ンケート回答依頼が3月28日付で

あった。

7. 震災支援「子どもの学び支援

ポータルサイト」開設(宮崎)

文部科学省競技スポーツ課か

ら被災地域の児童生徒等必要と

する支援をより受けやすくなるよ

う、「東北地方太平洋沖地震・子

どもの学び支援ポータルサイト」

を開設したので、積極的な被災地

域への支援と当サイトの利用、活

用依頼が4月1日付であった。

8. 「友の会」入会案内(宮崎)

信州大学から「信州大学山岳科

学総合研究所友の会」を設立した。

入会案内があった。

9. 一般財団法人への認可決定報

告(宮崎)

財団法人自然公園財団から3

月29日付で一般財団法人への移行

が認可された旨の連絡が3月29日

付であった。

10. 山の日制定推進パンフレット

第3弾の発行(成川)

第3弾「安全編」を作成中、4

月中に印刷を完了する見込みであ

る。

11. 震災義援金状況(成川)

3月22日～4月13日現在、20

5名の方々から319万円の義援

金が寄せられている。この運動は

6月10日まで継続実施する。

12. 会報『山』4月号編集報告(神長)

『山を考える』の第3弾

『安全編』ができました



山岳5団体でつくる「山の日」制

定協議会がシリーズ化して作って

いるパンフレット『山を考える』の第3

弾『安全編』が出来上がった。10万

部のうち5万部の配布をJACが引

き受け、会員各位には、6月の通常総

会案内に同封して2部ずつお届けす

る。第1弾の『知識編』、第2弾の『健

康編』と同じく3折式のQ&Aで山

登りの安全を考えてもらい、「山の

日」づくり運動へつなげようと企図

した。今回は、日本山岳ガイド協会が

中心になって制作した。

ルーム日誌

4月

4日	総務委員会 高尾の森づくりの会
5日	図書委員会 二火会 スケッチクラブ
6日	常務理事会 集会委員会
8日	フォトクラブ
11日	スケッチクラブ スキークラブ 九五会 01会
12日	海外委員会
13日	理事会 休山会 みちのり山の会 山想倶楽部
14日	会報編集委員会 山の自然学研究会
15日	青年部
16日	01会
18日	総務委員会 資料映像委員会 J A C・Y O U T H P T
19日	山岳研究所運営委員会 海外委員会 スキークラブ スケッチクラブ 00会 有志閑談会
20日	三水会 麗山会 フォトクラブ 山岳地理クラブ
21日	科学委員会 東京多摩支部 つくも会
22日	東京多摩支部
25日	会計監査 学生部 支部活

性化PT

26日 インターネット小委員会

千葉支部 ゆきわり会

高尾の森づくりの会

27日 常務理事会 自然保護委員会

会

28日 山遊会 高尾の森づくりの会

会

4月来室者577名

■会員異動(4月)

物故

柴田篤志 (4932) 11・4・5

吉村公一 (9800) 11・3・28

岩切岑泰 (11016) 11・1・31

菴谷利夫 (12352) 11・2・28

杉山都子 (13288) 11・4・6

退会

宮本敬之助 (2386)

松田柳子 (5645)

藤本多加志 (10422) 熊本

妹尾律子 (10611) 東海

神田 孝 (10973)

徳留勝次郎 (12224) 宮崎

辻村清房 (13865) 関西

安藤清彦 (13946)

終身会員

柳 明雄 (7089) 茨城

図書受入報告（2011 年 4 月）

著 者	書 名	ページ / サイズ	出版元	刊行年	寄贈 / 購入別
宮家準（編）	山岳修験への招待——霊山と修行体験	223p / 20cm	新人物往来社	2011	出版社寄贈
小笠原岩雄（編）	東京農業大学農友会山岳部報告（第4号）：DAS NEBELMEER	557p / 27cm	東京農業大学山岳会	2011	発行者寄贈
村口徳行	エベレスト登頂請負い業	254p / 20cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
錦織英夫 他（編）	風の記憶——日本山岳会学生部アラスカ・カナダ登山隊 1966	59p / 25cm	錦織英夫（私家版）	2011	発行者寄贈
日本山岳会山形支部（編）	山形支部創立60周年記念誌	134p / 30cm	日本山岳会山形支部	2011	発行者寄贈
森下敏雄	体験から語る—中高年と初心者のための安全登山ハンドブック	187p / 19cm	羽衣出版	2011	出版社寄贈

I N F
O R M

インフォメーション

A T N

◆連続講演会 語り継ぐ日本山岳会の歴史 歴代会長「あの頃、そして未来へのメッセージ」を語る

資料映像委員会

連続講演会第4回は、20代会長・大塚博美氏を迎え、在任中のお話などをDVDに収録します。

大塚氏は、1999年5月から03年5月までの2期を歴任。在任中、日印合同東カラコルム踏査隊、日中合同チョー・オユー女子登山隊を派遣させるなど海外登山を推進しました。また、これまで2次・3次マナスル遠征に参加。70年エベレストで登攀隊長を、さらに88年日・中・ネ三国合同登山では日本側の総副隊長を務めました。

日時 7月16日(土)14時より

場所 山岳会集会所・先着40名

問合 羽田栄治 TEL 03-3339

93975)

*終了後、「大塚さんを囲んで」懇親会を開催。会費は500円の

予定。希望者は、当日申し込んで下さい。

◆第31回日本登山医学会開催

日本登山医学会

メインテーマ「実践的な登山医学をめざして」。内容の詳細については12ページを参照ください。

ロビーで被災地支援登山用品チャリティーバザーや展示などもあります。未使用の山用品を供出できる方は、左記の事務局に5月30日までに送りください。

日時 6月11日(土)、12日(日)

会場 国立オリンピック記念青少年総合センター(代々木)

会費 会員5000円、一般1000円/日、

学生10000円/2日

懇親会 30000円(学生のみ

10000円)

申込 HP、メール、FAXにてお

申し込みください [http://](http://tozanigaku.web.fc2.com/)

tozanigaku.web.fc2.com/

index.html

✉ tozanigaku31@yahoo.co.jp

FAX 045-573-9599)

事務局 (〒230-8501 横浜市鶴見区鶴

見2-1-3 鶴見大学 歯

学部麻酔科 野口いづみ)

◆第9回土曜懇話会 集會委員会

尾上会長をお招きし、貴重な体験談や山への想いなどをお聞きし、参加者と懇談していただきます。

日時 7月2日(土)14時より

場所 日本山岳会104号室

問合 野崎和彦 TEL 090-89

61-1866

✉ nozaki_kaz@yahoo.co.jp)

◆「第19回山岳写真展」を開催

アルパインフォトビデオクラブ

山に登り、心に映った山々を、それぞれの視点と感性で捉えた写真展。国内外の山岳自然、約40点。

会期 8月25日(木)31日(水)10時

より18時、最終日は14時)

場所 日本写真会館5階 ポート

レートギャラリー(JR四

ツ谷駅より徒歩3分 TEL

03-333513002)

問合 川嶋新太郎 TEL 03-338

730907)

◆巡回写真展のお知らせ

22年度「アルパインフォトビデオ

クラブ」の作品約40点を、次の支部主催にて巡回展示します。

●山形支部

会期 8月18日(木)23日(火)

場所 山形県酒田市総合文化セン

ター 1階ホール

問合 山形支部・志田郁夫 TEL

0234336182)

●信濃支部

会期 9月1日(木)28日(水)

場所 長野市大門町「柏与フォト

サロン大門」(柏与文具店

2階

問合 柏与フォトサロン大門 TEL

0262327609)

東日本応援フォーラム

NPO法人日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストHAT-J(代表・田部井淳子)と毎日新聞では、東日本応援フォーラムを企画しています。

日時 6月25日(土)18時30分~20時30分

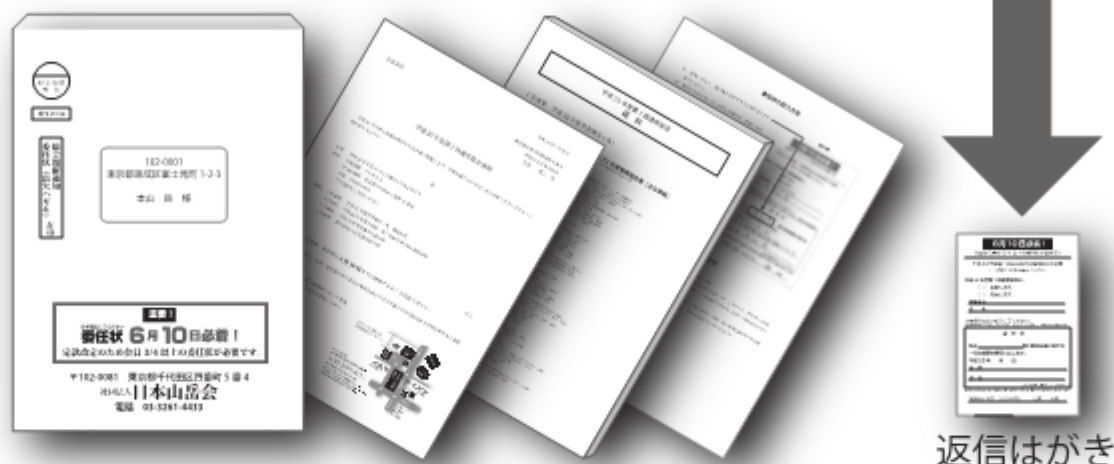
内容 田部井淳子「ふるさと福島への思い」
東野良(山岳写真家、元NHK報道カメラマン)
「3・11からの百日と麗しき東北の山々」

場所 昭和女子大 グリーンホール

申し込みは、毎日企画サービス「東北の自然と山を語る」
係(〒100-8051東京都千代田区一ツ橋1-1-1 FAX03-3212-0405)へ、ハガキかファックスで。6月14日必着
問合 HAT-J TEL 03-3237-6733 (平日13時~18時)

6月の総会案内を発送します。 欠席の会員は **委任状(はがき)を必ず送り返してください**

総会案内は
5月下旬に
発送します。



定款変更には委任状での意思表示を含め、 3/4以上(約3900名)の会員の賛成が必要です。

6月18日(土)開催の平成23年度第1回通常総会では22年度の事業報告、同収支決算・財産目録、新役員人事などのほか最重要課題である定款の変更が審議されます。

3月の総会で私たちは《公益社団法人を目指す》との方針を決めました。これを受けて理事会は、内閣府への認可申請に向けて、法人改革新法に沿った「定款(案)」と「定款施行細則(案)」を決め、6月総会に諮る運びとなりました。

繰り返しますが、定款の変更(改訂)には全会員の3/4の賛成が必要です。

およそ3900名が賛成の意思表示をしない限り、新法人への移行手続きは進展しません。

総会に出席できない会員各位に、委任状の提出をお願いするのはそのためです。

委任状を出すに当たっては次の注意事項を守ってください。

- ① 6月10日までに到着するようお送りください。
- ② 委任状には必ず住所氏名を記入してください。
- ③ 議決を委任する人の欄には、総会に出席する会員の名を書いてください。人物を特定できない組織名は無効になります。
- ④ 会長(=議長)に委任した場合は定款案、細則案に賛成したとカウントされます。

いつの総会でも、書き方が不備で10パーセント以上の無効となる委任状があります。同封する見本を参考にして記入ください。委任状を有効なものとするため、会員各位のご協力をお願いいたします。

問い合わせ先：総務委員会
soumuiinkai@jac.or.jp

◆編集後記◆

●4月号の「東日本大震災の被災現場から」の記事で、大谷福島支部長の報告に、「奥会津の山へぜひ」とありました。さっそく福島県三春町出身の田部井淳子さんに、「東北の山へ行こう」を綴ってもらいました。会員の皆さんも、今年こそ東北の山へ行きましょう。

●今年の「黄金のピッケル」賞に海外助成金を受けた日本人ペアが受賞しました。その審査員でもあった萩原理事に、受賞の経緯を報告してもらいました。

●春のエベレストで、尾崎隆さん遭難の報が入ってきました。実力も実績もある、日本を代表する登山家の一人だっただけに大変残念です。心からご冥福を祈ります。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 792号

2011年(平成23年)5月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上昇
編集人 神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社